

## 家畜排せつ物処理と普及活動



(社) 全国農業改良普及支援協会  
会長 鈴木 信毅

平成11年に家畜排せつ物処理法が施行され、以降、畜産農家の家畜排せつ物の処理施設の整備が急速に推進されていると聞く。同時に、生産された堆肥等の有効利用が種々の理由から当面の重要課題になっていると聞く。日本の農業が失った耕種部門と畜産部門の連携、有機物資源を活用した土づくり、家畜糞尿・堆肥に止まらず地域内の様々な資源を活用した地域内リサイクルの構築、等を考える上で避けて通れない問題であると考え。いわば、日本の農業に、健全・健康な農法を取り戻し、安全・安心な農産物を持続的に消費者に提供していくための基本課題であると考え。そこで、私が関係する全国農業改良普及支援協会の若干の資料をご紹介しますと思う。

当協会は、平成16年4月、それまでの全国農業改良普及協会が、その他の2団体と統合して、全国農業改良普及支援協会として再発足した。名称中に支援という2文字が加わっただけであるが、全国の普及組織が種々課題を抱えている中で、これを支援するという役割がより大きく期待されているものと気持ちを新たに取り組んでいるところである。

また、17年度からは普及制度の改正があり、従来の普及員、専門技術員という区分を廃止し、新たに普及指導員という呼称に統一して、技術水準のレベルアップを図ることとしている。

普及指導員の数は、18年4月現在で総数8,886人、普及指導センターの数は457カ所となっている。このうち畜産関係は、15年度現在で、専門技術員60名、普及員927人(全普及員の10.6%)となっている。

私どもの協会では、普及職員の情報活動を強化するため、情報ネットワーク網を活用して現場での普及活動事例を収集している。累積ではかなりの事例数になるが、畜産環境に関連する用語で数カ年分をキーワード検索してみた。「堆肥利用」196件、「耕畜連携」144件、「資源循環型農業」36件、「畜産環境保全」30件などとなっている。事例毎のご紹介は出来ないが、農業改良普及事業の畜産担当普及指導員が本問題に精力的に取り組んでいる様子がかがわれる。筆者の目に止まった事例の課題について、例示すれば次の通りである。

家畜排せつ物処理法の制定を契機にした家畜糞尿処理施設の整備と堆肥利用、耕種部門と畜産部門の連携による家畜排せつ物の地域内での循環利用を進めるもの、堆肥の利用促進とエコファーマーの認定、有機物を活用した減農薬減化学肥料栽培の推進等の事例が多いが、作物との関連では、牛糞堆肥を活用した良食味米づくり、新規の野菜作導入や果樹経営・畑作経営における堆肥利用、茶の減化学肥料栽培の実証等がある。変わったところでは、町の農業公園の施設を核としたリサイクルの仕組みづくり、堆肥の流通促進台帳づくりや町の畜産堆肥マップの作成、ホテル生ゴミコンポストの地域内リサイクルや食品廃棄物リサイクル堆肥の活用、微生物資材利用による家畜糞尿リサイクルシステム、地産地消運動や都市・農村交流と関連した土づくり運動、等、取り上げればきりが無いほど、地域の実態に即した取り組み、これを支援する普及活動が数多く推進されている。